

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32406

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13370

研究課題名（和文）現代韓国における東洋史学の再編と東アジア論の形成

研究課題名（英文）The Reorganization of Oriental History and the Formation of East Asian Discourse in South Korea

研究代表者

小宮 秀陵（KOMIYA, HIDETAKA）

獨協大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：30802011

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、韓国で東アジア史という広域世界の歴史に関する研究が形成され、定着していく過程を跡づけ、その特色を明らかにするものである。そのため具体的に以下3つの点に対して考察した。（1）1960年代の広域世界論の登場とその意義（2）朝貢・冊封という用語の登場とその背景（3）東アジアという用語の定着とその背景

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、韓国での東アジアの形成過程を跡づけ、その背景を考察することができた。冷戦とその崩壊という社会的状況と軌を一にしつつ形成された韓国的な東アジア像を分析することで、中国中心性からの脱却という特色や、韓国的なナラティブとその分析の必要性を確認することができた。

研究成果の概要（英文）：This research traced the trend of wide-area historical studies, such as "East Asian history," in South Korea and clarified its characteristics. The following three issues were analyzed for this purpose.

(1) The significance of the emergence of the terms related to the wider world in the 1960s (2) The background of the creation of the term "Tribute-Investiture" (3) The background of the establishment of the term "East Asia".

研究分野：朝鮮古代史

キーワード：東アジア ナラティブ 冷戦 朝貢・冊封

1. 研究開始当初の背景

東アジア史は、歴史の共有という側面が強調されて研究が進展した。日本でも東アジア史は時間と空間両側面からアプローチされ、広域世界論の検討がなされるようになった。しかし、日韓両国で使用する東アジアという用語は、その含意に対する差異が検討されているわけではない。東アジアという用語が使用されてきた史的文脈は、一国史的側面が強く表れている。特に、韓国の東アジアという用語の史的文脈に関する研究は尽くされているとはいえない。そのため韓国の東アジア論の研究史および思想的・社会的特色を検討する必要がある。本研究は、**1960**年代以降、東洋史研究が整備されていく過程を明らかにすることから始めることにした。

2. 研究の目的

現在日韓両国において東アジア論は、史的文脈の共有という側面では課題がある。史的文脈共有の前提として、本研究では、韓国の東アジア論の研究史および思想的・社会的特色の検討を行うことで、韓国型の東アジアの歴史像の特色を明らかにすることを目的としている。近年韓国でも広域世界論を示して歴史像を再検討する動きが進み、東アジアや東部ユーラシアという用語を使用した広域世界の歴史像が語られるようになってきている。一方で、**1960**年代頃から韓国ではすでに東洋・東亜などの用語を使用して広域世界を設定した研究が進められていた。**1960**年代当時の広域世界論が登場し、現代の広域世界論へと変容していく韓国の史的文脈を読み解くことで、韓国の東アジアの歴史像の特色を明らかにしていく。

3. 研究の方法

韓国の東アジアの歴史像の特色を明らかにするために、まず、**1960**年代韓国における広域世界論の登場とその背景について検討する。次に韓国のなかで「朝貢・冊封」という用語が登場した背景を検討する。三つ目に東アジアという用語が定着していく背景を明らかにする。上記三つの歴史像を描くために、口述資料で補完しながら研究を進めていく。

4. 研究成果

研究成果は論文**2**点になる。そのうち本研究の全体的な内容は、「韓国古代研究における東アジア論と東部ユーラシア」『中央史論』**58**, **2023.04**(韓国語論文)にて発表した。以下概略を説明すると次のとおりである。

(1)1960年代韓国における広域世界論の登場とその背景

韓国では**1950**年代中葉以降、東方・東亜・亜細亜と呼ばれる広域空間名を付した研究所や雑誌などが現れるようになり、そこでは、韓国を基軸とした広域空間の研究が重要視されており、韓国の位置づけを重視したアジア空間の認識が存在したと評価する。韓国で東アジア空間が設定されていく背景には、アメリカからの研究資金援助や朝鮮戦争によって韓国が世界的な関心を集めたことにある。

すでに**1930**年代、朝貢の経済的側面から、古代朝鮮半島の固有性を見いだそうとする理解があった。韓国でも**1960**年代後半にはフェアバンクの朝貢に対する理解を批判的に継承し、朝貢を基準にしつつ、独自の広域世界像を創出しようとしていた。そこでは、中国中心で一方的な関係よりも、相互関係を重視し、韓国の歴史的特色を明らかにする研究が進められた。朝貢を基準にした理解は、その後韓国古代史では、韓中関係史のなかで宿衛といった韓国的特色を見いだす研究へとつながった。

(2)「朝貢・冊封」という用語の登場とその背景

韓国では、**1980**年代以降、東アジア世界の外交関係の韓国的特色を見いだす文脈で「朝貢・冊封」という用語を創出した。これは、朝貢と冊封を一体的に把握することで、広域世界の外交像を描くものであった。この用語は、韓国の東洋史研究側から提起されすぐに韓国古代史でも定着していった。これは、韓国古代史で古代の外交関係の性格を分析することで、各国の交渉の実態が明らかになり、その結果、中国中心の東アジア像から離れることができると考えられたためであった。

韓国で「朝貢・冊封」という用語が創出されていく背景には、中国学界へも影響を及ぼした

日本の東アジア世界論および冊封体制に対する批判的姿勢があった。また、**80**年代は近代外交の成立の約**100**年後にあたり、そのような問題意識が過去の外交像に対する関心を惹起したものと考える。

(3) 東アジアという用語の定着とその背景

1990年代以降、冷戦の崩壊と中国との修交により中国所在の資料に対する接近を容易にし、高句麗史研究に影響を与えた。また、東北工程に対応する形で**2000**年代に入り韓国ではあらためて「朝貢・冊封」に関心を向け、広域世界を設定する実践として東アジアという用語を使用していった。

その結果、韓国では中国中心秩序の限界と韓国古代国家の中心性に対する検討が進展した。前者では「朝貢・冊封」のみで説明する限界から「朝貢・冊封」の概念そのものに対する再検討が行われ、新たな広域空間を設定する時空間の定義が課題となった。後者では、韓国古代史の立場から、黄海や日本海を基準に海域・海洋を中心にした韓国古代史像が提起された。また、**1960**年代の朝貢をもとにした広域世界に対する理解も見直しとともに、文化的側面から東アジアを再構成しようとしてきた成果も再照明されるようになった。

総じて、韓国で形成されている東アジア論は中国中心性からの脱却という問題意識があり、これが冷戦とその崩壊という文脈で展開したと評価する。韓国の東アジアの史的文脈を明らかにしたことで、韓国の歴史のナラティブに対する分析も重要になると展望する。

なお、本研究は研究課題の**2**年目から新型コロナウイルス感染症の拡大により現地調査が困難になり、文献の収集を軸とした方向性を重視する形で進めた。また**3**年の研究計画の一部見直しも迫られ、**1**年延長し、**4**年間での研究となった。最終的には現地の研究者の助力によって現地調査も実施することができ、本研究を遂行することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小宮秀陵	4. 巻 21(2)
2. 論文標題 ソウル大学校東亜文化研究所の設立と初期の活動について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マテシス・ウニウェルサリス	6. 最初と最後の頁 47 - 61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮秀陵	4. 巻 58
2. 論文標題 韓国古代研究における東アジア論と東部ユーラシア	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央史論	6. 最初と最後の頁 123 ~ 153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------